# 【概要】

魔法学園RPGハーベスト「君の願いは～Your wish～」
推定人数3人
推定時間　6時間～8時間
推奨リベラル
テレポート・ブリンガー・各種オペレイト系
今回予告

桜咲き、乱れ散る

その生命（いのち）を散らすとき

君は、何を望むのか？

魔法学園RPGハーベスト「君の願いは～Your wish～」

願い叶える時計は、まだ動く。

シナリオハンドアウト

PC1コネクション：永麗　桜（えいれん　さくら）
推奨関係　同情/心配
君は魔法学園ハーベストの学生だ。
ある日、君はクリーチャー討伐にて大きな怪我を負ってしまう。
そして魔導次元の病院に入院することになるのだがそこで、たまたま同室だった桜に出会う。
彼女は小さいころから身体が弱く、更に今は治療法が確立すらしてない難病に身体を蝕まれており、ずっと病室で一人だったという。
やがて、怪我も良くなり退院を次の日に控えたあなたは、彼女に「また来てほしい」とお願いされる…。

PC2コネクション：エイミ
推奨関係　興味/友人
君は魔法学園ハーベストの学生だ。
君には１年前に出会ったエイミという変身魔導学科の友人がいる。
しかし、彼は自分の過去を全く喋ろうとせず、異常なまでも”生きる事”に固執しているような素振りをみせる…。
そんな彼には毎日よく会っている人がいるらしく、一緒にその人に会って欲しいと君に頼む。
それは魔導次元病院に入院している桜という少女で…。

PC3コネクション：アラン＝ルイ
推奨関係　心配/後輩
君は魔法学園ハーベストの学生であり、カース特対の生徒でもある。
そんなあなたにはアラン＝ルイという最近カース特対に入ったばかりのボーイッシュな少女の後輩がいる。
しかし、アランの戦い方は少しばかり危なっかしく、攻撃魔法を主にしているはずなのに、前に出ては自分が肩代わりしてでも攻撃を防いでしまう。
そんな彼女だが、なぜそんなにも他人を護ることに固執するのか…。

NPC
「永麗桜（えいれん　さくら）」
魔導次元病院のとある一室でPC1が出会う12歳の少女。
その12年間のほとんどを病室で過ごしており、学校なども行けてないため、病室で授業を受けていた。
ハーベストにも入学したいと考えてはいるのだが、今の状態ではまともに授業を受けれないと思い、入学手続きはしていない。

「エイミ」
PC2の友人で名前はエイミ、変身魔導、１３歳の2年生…。
年齢よりも見た目はかなり大人びている。
しかしそれ以外の事は知らず、特に過去の事は特に話したがらない。
そんな彼だが、彼の言動を見ていると、あることに固執しているようだ…。
それは、生きる事…。

「アラン＝ルイ」
杖魔導、１２歳の１年生。

カース特対に入ったばかりのPC3の後輩
他人を護るためなら傷つく事を厭わない。
そのため周囲からはいつも「死にたがり」と思われがちだが…。
また、よく名前からも見た目からも間違われるが、女である。

---

# 本編

## 【シーン1：出会い（PC1）】

時期は3月半ば頃。
PC1はとある理由（授業orHSW）でクリーチャーハントを行っていた。
しかし、報告以上の数のクリーチャー（もしくは報告と違う大型クリーチャー）に囲まれてしまい、重傷を受け、逃げるしか無かった。
（アクションorリベラルアーツorRP）
なんとかクリーチャーを退けたが、意識を保てず、pc1はそのまま意識を手放してしまうだろう。

次に目を覚ますと、白い天井、どうやらここは病院のようだ
（RP）
桜「あ、目が覚めましたか？」
声のする方に目を向ける。
そこには病衣（びょうい）を着た女の子が…。
桜「よかった…。ずっと眠っていたから心配したんですよ？」
（※時間を聞かれた場合およそ運ばれてから1日くらい眠っていたと答える）
桜「あ！ごめんなさい。まず名乗らないと。私の名前は永麗桜。気軽に桜とでも呼んでください♪」
桜「せっかくですから、あなたの名前も教えてくださるとうれしいな♪」
桜「PC1さんですか…いいお名前ですね♪最近は全く人が来なかったので寂しかったのです♪　あの、あなた、もしかしてハーベスト学生ですか…？」
桜「やっぱり！！先生がハーベスト学生が来るって事をおっしゃっていたので！！良ければ私にハーベストの事や魔法について教えてください！！」
桜「ありがとうございます！！うれしいな～♪けほ…ごほごほ……。」
喜んでいた彼女、しかし急にせき込む。

桜「ご、ごめんなさい…ちょっと私、難病にかかってて…。治療法もまだないって…。だから外の世界が珍しくて…。そ、そんなことより色々教えてください！！」
そういうと彼女はPC1に顔を近づける。
その彼女の瞳はキラキラ光っており、まるで好奇心の塊のようにも見えた。

## 【シーン2：固執（PC2）】

中庭を通るとき、目に入るのは桜のつぼみ、そしてそれを眺めているエイミの姿。
君は1年前のエイミとの出会いを思い出す。
今から1年前…
たまたま通りかかった中庭で、君は満開の梅の花ではなくまだつぼみの桜の木を眺めている生徒を見つける。
咲いてもいない桜を眺めている彼にどうしてその木を見ているのか疑問に思った君はつい、彼に話しかけてみた。
(PCのRPは絶対に受けない)
時は戻り、pc1と同じく3月半ばの事。

気が付くと、エイミはこちらに来ており、話しかけてきた
「おはようございます、PC2さん」
「今から授業にでもいくのですか？よろしければ途中までご一緒しても？」
「ありがとうございます、ではいきましょうか。」
（RP）
2人で教室に向かいながら廊下を歩いて行く…。

しばらくすると、エイミが急に立ち止まり君に質問を投げかけた。
「PC2さん…、桜って一番綺麗なのっていつだと思いますか？」

（満開等の回答）
「確かに満開の時も綺麗で美しい…ですが僕は違うと思うんですよ…。僕は…桜は散る時が一番美しいと、思うんです…。」

（散るときと回答した時）

「…さすがPC2さんですね…。ええ、僕も同じ回答…。桜は散るときが一番美しい…。」

「では…人はいつ、美しくなれると思いますか…？」
「……人は、生きている今が美しい…。どうしてこうも違うのでしょうか…。同じ生命体なのに…。」
そういうと、エイミは桜の木を見て悲しそうな表情になる。
ときおり、エイミはこんな悲しそうな顔をする。
その思いを抱える理由は答えないが、PC2に質問しては命についてを、いや…”生”についてにまるで固執しているのように言葉を紡ぐ…。
「生きる、それは、僕にとって幸福を求めることでもあるんです。」
「"人間は人生に何を求めているだろうか、人生において何を実現しようとしているだろうか。"
　この問いはすぐに答えを示すことができる。
　人間が手に入れようとしているのは自分の幸福である。
　人間は幸福でありたい、幸福なままでいたいと願っているのである
…まあ、授業で行ったフロイトの文そのものですが。」
「この幸福が、続けばいいのですが…ね。」
「おっと…またつまらないことを話しちゃいました。早く行きましょうか。」
彼は誤魔化すように笑ってみせると颯爽と教室に向かおうとする。

## 【シーン3：注意（PC3）】

こちらも、3月の半ば頃。
あなたが医務室の前を通りかかろうとすると、
「ありがとうございましたー！！(クソデカボイス)」
という声と共に、医務室から勢いよく飛び出して来たのは、あなたが所属するカース特対の後輩、アラン＝ルイだ。
「あ！先輩！こんにちわ！」
「いやぁ…まぁた発動体壊しちゃいましたよ…はははは！」
「また発動体を買わないとなぁ…。」
笑っているが、毎回クリーチャー討伐の際、前に出ては周囲をかばい、毎回のように発動体を壊しては、大怪我を負っている。
カース特対の先輩であるあなたも何度か彼女と任務に行ったことがあるが、確かによく前に行っては不得意な防御魔法を打っては失敗して、発動体を破壊されている。
「ん？どうかしましたか？先輩。」

「え？怪我？大丈夫ですよ！！これくらい何ともないですよ！！」
「なんともないですって！！」
「先輩は心配しすぎですって！」
そういう彼女だが、どう考えても大丈夫な傷ではなく、あっちこっちに傷ができている。
(RP)
（PLからどうしてこんなに傷つくまで護るの？等の質問がくれば）
あなたがその質問をすると彼女の顔はとても暗いモノとなり
「…べつに…、いいじゃないですか。誰かを守るのに理由なんかいりますか？誰かが目の前で傷つくのを見るくらいなら、僕…。」
「先輩や他の人も、きっと辛いのはわかってるんです。自分がかつてそうだったように、でも、守られている方が"私"にとって、もっと怖いことなんです…」
「思い出すだけで、怖いんです。いまだにここに立っているのが」
というアラン、よく見ると、その体は小刻みに震え、アランはその体を抑えつけようとしている。
（RP）

（PLがどうしてこんなに傷つくまで護るの？等の質問が来ないならここに飛ぶ）
「…（そ、）そんな暗い顔しないでくださいよ！！ほら！早く特対の部屋に行こうじゃないですか！！きっと困ってる人がいるはずです！！」
そういうと彼女はそのままPC3をおいてカース特対に走っていく。
（走り去っていく彼女を後ろから見ているPC3、しかしあなたにとってその元気な姿は強がっているように見える。）

## 【シーン4：お見舞い（PC2,PC1）】

あれから次の日
いつものように廊下で出会い、そのまま歩いているPC2とエイミ。
お互いにこの後何もないのだが
「さて…そろそろ行かないと…。」
いつもエイミはこの時間になると、いつもどっかに行ってしまう。
しかしこの日は少し様子が違う
「…しかし、いつも僕だけじゃあの子も暇かな…。」
「あ、そうだ、PC2さん、良かったらこの後僕に付いてきてくれませんか？」

「あなたに会って欲しい人、会わせたい人がいるんです。」

（付いていく等の回答）
「ありがとうございます。では行く前にちょっと花束を買わせていただきますね」
といい、彼と花屋に寄り、ピンクのコチョウランの花束を買って行く。

(gmアドバイス
通常、赤い花、鉢植え、菊はお見舞いにタブー)

（付いていかない等の回答）
「まぁまぁ、そんなこと言わないでくださいよ。僕にとって生きる理由にも等しい人なんですから嫌でも付き合ってください。あ、行く前にちょっと花屋に寄って花束を買わせていただきますね。」
といい、彼に無理やり背中を押されていく。
彼は言葉通り、花屋に寄ると、ピンクのコチョウランの花束を買って
「お待たせしました！さ、行きましょうか！」
といい、花束を持って再びあなたの背中を押していく。（花言葉　ピンクのコチョウラン（君を愛しています））

PC2とエイミがこっちに向かっている間、PC1と桜の病室では…
「それからそれから！？その続きは！？」
一昨日に負った怪我そのものはそこまで大きな怪我ではないため安静にさえすればすぐによくなると言われ、pc1の短い入院生活が始まろうとしていたのだが。
この説明を受けてから、今の今までまで隙あらば桜から、いままでの出来事、ハーベストの授業についてを質問責めにされていた。
「いいなぁ…ハーベスト…楽しそう…。」
「お友達も多そうだし…。」
「…私ね…身体が弱いから何度も入院してはいつもお見舞いとかで…、それでせっかくできたお友達もめんどくさくなって来なくなっちゃって…。今じゃあ、一人を除いて誰もいなくて…。」
「で、でも悪いのは病弱な私なんだし...!それに今はPC1さんいるから寂しくないですよ！」
「それに毎日お見舞いに来てくださる人もいますし…。」
桜がそういうと、部屋の扉がコンコンとなる。
「あ！噂をすればってやつですね♪入っていいよ、エイミ！！」
病室の扉が開くと

「失礼するね、桜。…っと他にも患者さんがいたかこれは失礼しました。」
扉から現れたのはPC2とエイミ。
「紹介するね、PC1！この人がさっき言ってた毎日お見舞いに来てくれるエイミ！」
「エイミ！紹介するね！こちら最近入院したPC1！」
「なるほど…よろしくお願いしますね、PC1さん。僕はエイミ。」
といい、エイミは頭を下げ、ペコリとお辞儀する。
「あれ？今日は一人じゃないんだね？」
「あぁ、そうだよ。紹介するよ、桜。こちら僕の友達のPC2さん。」
「あ、あなたがエイミがよく話していたPC2さん？よろしくお願いしますね、PC2さん！私は桜！永麗桜！エイミのお友達ってことは、ハーベスト生？」
「うん、そうだよ。」
「おお！つまりここにはハーベスト生が三人もいるんですね！！」
と桜は大喜び。
（PC1とPC2のRP）
「あ、それと、桜。はい、これ。」
そういい、エイミは買ってきたピンクのコチョウランの花束を渡す。
「あ！今日はピンクのコチョウランの花ね！ありがと！エイミ！！」
そういい、桜は隣にある花瓶に花束を差し込む。
「ねぇ！せっかくだから3人のハーベストの話、聞かせてほしいな！」
「桜、興奮するのはいいけど、あまり大声出しちゃいけないよ。体に障る。」
「あ…えへへ…つい…。け、けど！お話はしてほしいな！」
「参ったなぁ…僕はいいけど、PC2さん、お願いしてもいいですか？」
（RP）

## 【シーン5理由（PC3）】

同時刻のとある別の場所、PC3はアランの面倒や世話をみることをカント先生に頼まれ、改めて二人ですごそうということになる。
「僕、先輩と一緒に戦えて嬉しいです！先輩の事は僕が絶対に守って見せますからね！」
「早速ですが、まずは戦い方を教えてください！」
「僕が庇う前に相手を倒せれば先輩が肝を冷やすこともないですよね？」

「…男でなくとも、前に立っていたいんです。守られる側じゃなくて、今度こそ守る側に」
そういうと、アランの顔は少し、暗い表情に…。

(PC2に守る理由、男らしく振る舞う理由を聞かれると)
するとアランの顔は一気に暗くなり
「まだ…言えません、で、ですがいつか、いつか必ず、必ず打ち明けます。先輩にはいつか…」
「先輩の事は大切なんです、大切だからこそ、いつか居なくなってしまわないか不安で…不安で…」
「言っても、消えない、って僕が受け入れられるまで、もう少し…もう少しほどまってください」
アランの呼吸は荒く、とてもではないが魔法を扱えるような精神ではなくなってしまう。
あなたが動こうとすると、あなたの服の袖を掴み
「ごめん、なさい…僕に、背中を向けないでください…あの時と、重なってしまって…」
「僕の、隣に居てください」
(RP)

## 【シーン6：退院とお願い（PC1）】

それから日が経ち、PC1が入院して、はや1週間。
毎日、エイミがこの病室に来て、PC2も連れてくる中。
怪我の治り具合、カース感染していないかなどを検査し、異常なしと診断され、PC1は明日退院することなっている。
「そうですか…明日退院ですか…。良かったです！PC1さんが退院できて！」
入院してからずっと隣にいた桜が笑顔でそういう。
しかし、その笑顔は無理やりしていることがわかる。
「にしても、もう退院だなんて、ちょっとうらやましいですね！はは…。」
再び無理やりしている笑顔、しかしその笑顔は少し悲しそうに見える。
「え？わ、私が悲しそうな表情をしてる…？そ、そんなこと……。」
「…正直に答えますね…。本当は…寂しいです…。別れなんて何度もしたのに…。やっぱり慣れませんね…。」
「あ、あの…！もし、ご迷惑じゃなかったら…たまにでもいいのでお見舞いに来てくれませんか！？」
「…っ！！ありがとうございます！」
さっきとは違う笑顔の桜。
今回の笑顔は心から喜んでいるとわかる。

…そして翌朝、退院の時間。
あなたが荷物をまとめて部屋をでる準備をしていると桜が話しかけてくる。
「PC1さん、お元気で！あと…その…約束、忘れないでくださいね…。」
「…っ！はい！ではまた！！」
扉を開けて部屋から出ていくPC1。
そのPC1を見送り、手を振っている桜。
その笑顔は心からの笑顔。

## 【シーン7恐れていたこと（PC3）】

PC3とアランはカント先生からの依頼でとあるクリーチャー討伐を依頼されていた。
内容は黒き森の奥地に潜むクリーチャー討伐。
依頼主であるカント先生も正直、アランを連れてのクリーチャー討伐はかなり気が引けていた。
しかし、人数不足もあり、依頼について聞いたアランが率先し、「任せてください！」と名乗り出てしまい、しぶしぶ依頼したと言った感じだ。
そんなこんなであなたはアランと一緒で大丈夫かという不安を抱えながら黒き森の奥地に2人で向かうことに…。
（RP）
「お！あいつみたいですね！よし！僕が前に出てクリーチャーを…というのはダメでしたね、では横から援護攻撃、お願いします！！」
戦闘が開始される
しかし、あれだけ言っていたアランだったが、戦闘を開始すれば徐々にあなたの援護範囲から逸れていき、あなたをマナプロテクトで庇いながら、アランはクリーチャーに攻撃をしていく。
当然、防御魔法が無いに等しい彼女、発動体に攻撃が蓄積していき、発動体である杖にヒビが…。
（RP）
「！！、すみません……。
でも、これくらい、何てことないですよ！！気を付けますから！」
そういいながら、彼女はふたたび、冷静にクリーチャーに攻撃していく。
すると命の危機を感じたクリーチャーが暴れ始め、魔法を乱れ打つ。
その魔法のうち一つがPC3に飛んできた。
あなたなら問題なく防げる魔法…
だが…
「嫌だ！！！」

といい、あなたの前に飛び出し、PC3をクリーチャーの攻撃からかばうアラン。
なんとか魔法の軌道をそらし、自分は魔法をうまく庇った…つもりだが、燃え盛る炎と風の刃によって、限界が近かったアランの発動体がバリン！！と鈍い音を立てて、壊れてしまう。
そのまま、クリーチャーの魔法は発動体を破壊されてしまったアランに直撃する。
致命傷はなんとか避けたが、発動体を失い、発動体優先効果が無くなったアランからは大量の血が流れる。
「い…いやぁ…ちょっと、無茶しすぎましたかね…。やっぱり、身体が動いちゃうみたいです、先輩」
「はは…、でも今度は護れましたよ、これで”私”も守る側になれたかな…、…智成…。」
といい、そのまま気を失う。
アランがそう言っていた間もまだ討伐されていないクリーチャーはあなた達の方に近寄り、攻撃しようとしている。
（RP:逃げるなり、討伐をするなり）

## 【シーン8：飽きれと興奮と病魔（PC3→全員）】

それからしばらくし、アランが目を覚ますと、そこは白い天井が目に飛び込んでくる。
「ん…こ、ここは…。」
といい、ゆっくりと上半身を起こす。
「あ！良かったです…。」
と横から声が…。
アランが横を見ると、そこには桜が…。
「あぁ…良かったです。汗が凄かったので心配したんですよ…。」
「えっと…。」
「あ！ご、ごめんなさい！いきなり話しかけてしまい…。私の名前は永麗桜。よろしくお願いしますね！」
「桜さんですか、僕の名前はアラン、アラン＝ルイです。よろしくお願いしますね。」
「アランさんですね！よろしくお願いします！」
そう2人が自己紹介し終わると、PC3が入ってくる。
（ここでPC3がアランへの説教。そしてアランが桜にPC3を紹介、桜もPC3に挨拶RP）

しばらくすると
「桜、失礼するよ。…って今日もお客さんがいるのか。」
扉から現れたのは、エイミ、そしてエイミと一緒にきたPC2、そして最近よくお見舞いに来てくれるPC1。

「あ！エイミ！！」
「エイミさんというんですね、よろしk……あなた…どこかで…？」
アランは、エイミを驚いた表情で見る。
エイミは一瞬、驚いた素振りをみせるがすぐに納得したような表情を浮かべた。
「……！？……気のせいじゃないですか、ほらこの世には同じ顔の人が3人いるって聞きますし。」
「…そう、ですか…ね？」
アランは首を捻る仕草をするが、それが傷に障ったのか、「いてて」と声をあげながらベッドに横になる。
（ここでPC同士のRPと自己紹介、エイミの紹介）

「…えへへ…。」
すると、桜が急に笑い出す。
「ん？どうかした、桜。」
「ん？んーん、ちょっとね。最近たくさん人がいるから楽しくて…。」
「だって、ちょっと前まではずっとこの部屋、独りぼっちで寂しくて…。」
「でも今はエイミはもちろん、PC1さん、PC2さん、そしてアランさんにPC3さんまでいるから楽しくて…。」
といい、笑うその笑顔は年相応の可愛らしい笑顔。
「ねぇ！アランさんやPC3さんのハーベストの話も聞かせてください！！たくさんの人の話を私は聞きたいのです！！」
（PC達のRP）
「そういえば、もうすぐ4月か…。」（今は3月の25日かそれ以降）
「てことは桜の誕生日ももうすぐだね。」
（PCのRP）

（もし、PCが去年のプレゼントを聞いてきたら）
桜ver「んー…それは私たちだけの秘密です♪」
といい、口の前に人差し指を立てる。

エイミver「あー…それは僕たちだけの秘密ですよ。残念ですが、これは言えません。」
といい、にっこりと笑い、口の前に人差し指を立てる。

(↓から続けて描写を心がける)
「あはは…みんなのお話、聞いていて楽しいです、こんな時間がずっと続けば……げほっ、ごほっごほっ…」

すると突然、桜が口を押さえて咳き込んだ。
そして、真っ白な指の隙間から漏れた、命を削る赤は真っ白なシーツにポタリ、ポタリと落ち、点々と花を咲かす。
この光景は、彼女が、長い間病院に居る理由を君たちに突きつけるだろう。
幸せとともに近づいていたはずの春を奪いさって、ふたたび冬が戻ってきたのではないかと思うように、空気は凍りつき、その場で声を上げるものは居なくなる。
刹那、ハッと状況をいち早く飲み込んだエイミは、ひどく取り乱し、桜に近寄り、声をかける。
「桜！？大丈夫！？」
「う、うん…ちょっと最近皆と話すのが楽しすぎて無理しすぎたかも…。」
（RP）

無慈悲にも、時間は流れる。
桜はまたやってしまったという、罪悪感と悔しさを顔に浮かべ、自身に課せられた運命を呪った。
桜の望む些細な幸福の時間を、自分で壊してしまったのではないかと、胸を不安で一杯にすれば、また身体が痛み出したのか表情は歪む。
アランはただ、桜の方に顔を向けて茫然とするしかなかった。
「……PC2さん、PC1さん、僕たちは帰りましょう。このままだと、桜の身体に障ってしまう…。」
桜「だ、大丈夫だよ！ちょっと体調が…。」
エイミ「だめ、また明日きてあげるから…、ね？」
桜「…うん…。」
といい、桜はしょんぼりする。
エイミ「ではアランさん、桜の事よろしくお願いしますね。」
アラン「…わかった……。」
エイミ「彼女を独りぼっちにしたくないので、頼みますよ。」
エイミは、アランにそういって、この場を出ていく。
エイミもまた、桜を蝕む"運命"を呪うような表情を浮かべていた。
（PC達のRP）

## 【シーン9、合同授業（PC全員）】

PC達は3学期終業式前、最後の授業に参加することになる。
桜や、別の授業を受けなければいけないエイミ、入院中のアランはこの場にはいない。

ただ、きっと教室や病院の窓越しに、同じ空の下で育った桜を見ているに違いないだろう。

この日の授業は、アスタロト大公爵主任の、カース感染学応用論2というもので、来年度の単位が先行取得でき、必死で受ける必要はないが、君たちは単位の危機、もしくは単なる興味、または君の話に期待を持ってくれる人のため受けることにしているのだろう。

「さて、講義を始める。」
「今日のテーマは、カースが精神を歪めたときに起こる変化についてだ。」
「まず、欲望に忠実である、一般的な動物やクリーチャーは、自分が飢餓に苦しむ状況に立たされた場合、仲間のエサを奪う、殺し合うという行動がほとんどだ。
しかし人間や、知能の高い動物はどのような反応を示すだろうか。」
「他人に食料を分け与える、自分のみが我慢する、他人から食料を強奪する。
…世間一般的な意見だけでも多様性が見られる。」
「このように、人間が下す、外的な強制なく自発的になされる行為、本能に背いた行動の原因となるところの意志を、自由意思という」
「この、自由意思というものは人生において様々な選択肢を用意する。
些細な物なら、朝の食事について、この日持ってくる飲み物について、放課後の時間の使い方について。」
「…より、明確なものならば、今、この場で生きることを続けるか、やめるかもだ。」
「大半はこの選択肢には生きることを選択して欲しい。
…しかし、カースに精神を蝕まれた場合、この自由意思はほとんど奪われるに等しい状態になる言えるだろう。」
「それはなぜか、それを理解するため、手元に配布した、マズローの要求5段階説の図を見て欲しい。」
「この図形は、人間が欲求を満たしていく際の優先順位および、実現段階を表したものだ。
このピラミッドの一番上、「自己実現欲求」至るまで順に、「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」「承認欲求」を満たしていく必要がある。」
「だが人間には自由意思があるため、たとえ生理的欲求が一時的に満たせなくても、上の段階にいくことができる。」
「例え話をするなら、睡眠不足、排泄行為に不満が残る環境だったり、美味しいものを食べれない劣悪な環境でも、自身の目標…ゲームで1位をとるためプレイ続けたり、テストでよりよい点数をとるため勉強を徹夜したりする行為を指す。」
「しかし精神がカースに蝕まれ、増幅した欲望や欲求が満たせない、我慢や無視ができない状態に陥ればマズローの段階欲求の上位にある、自己実現から遠ざかり、その欲望を満たすことを脅迫的に行い続ける。」
「カース症状が末期まで迫ったものは、最後に…欲望を満たされないという現実から、精神的な視野が狭まり、自由意思による、選択が与えられる。
この現実からどのように逃げるか。
大抵のものは死を選ぶ。」
「だが、例外としてカースの症状が末期まで進行したのにも関わらず、死なないものがいるのは、歪んだ欲望を自力で満たし、自己実現まで突破できた場合だ。」

「さて、ここからは例のごとくグループワークとする。」

アスタロトは学生を3人1組に班分けPCたちは同じ班となる。

「今回も、以下のテーマについて各班で話し合い、考えをまとめ、授業の終わりで1班1枚、自由記述型のレポートの提出を終業式までにはするように。内容によっては来年度ドロシーの手によって張り出され高く評価される場合もある。精進するように。」
・カース感染後の暴走や自殺を最小限にコントロールする方法を提案せよ。

「さて、今日の講義はここまでだ。説明について何か質問は？」
「無いようなら、またお前たちの来年度の活躍を期待している。そして、また私の授業を受ける事になった時、また会おう。」
アスタロト先生はそういうと、足元に魔法陣を展開し、この場から立ち去る。

## 【シーン10：心配（PC2からPC全員）】

(お見舞いから2日後、)PC2のところに心配そうな顔をしたエイミがやってくる。
「あぁ、PC2さん…。今日は桜のとこに行きませんか？」
「彼女、おそらく寂しい思いしてると思うので…。」
（なおここでPCが昨日や一昨日お見舞いについてを聞いたら、その2日は面談拒否になっていたという事を伝える。）

（行くと答えたら）
「ありがとうございます。」

（行かないと答えたら）
「…お願いします…」
（と、PC2が行くというまで説得）

しばらく2人で歩いているとエイミが口を開く
「PC2さん、僕は前、自分の生きるという意味を話しました。
では今度は、PC2さんにとって生きるということはどういうことだと思うか、教えてくれませんか？」

「…ではもしもあなたにとって大切な人が今にも亡くなりそうにしていて、そして助ける手段が見つからない時、あなたはどうしますか？」
「…そうですか…。」
「…僕の考えは…生きることは大切な人のためにあると考えてます。もちろん僕の考えですがね。
正確には、僕が人生で幸せにいられる理由ですが…
そしてもし、大切な人が亡くなりそうなら…僕は…僕の生きる”意思”を分け与えたい…そう思ってます。もちろん、それをして何になるんだって話ですがね！ははは…。」
「…早く行きましょうか。」
病院に急ぐ2人、今日もエイミは途中で花屋により、花を買う。
今日は青いヒヤシンスの花束。（花言葉：変わらぬ愛）

そのまま受付を済ませ、桜の病室に向かう。
「失礼するよ、桜、アランさん、こんばんわ。」
「あ、エイミさん、こんばんわ。」
「あ、エイミ…。その…この前はごめんなさい…。」
「いいよ、そんなことは、それより今日はどう？」
「うん、この間よりはいいよ。」
「ならいいけど、あまり無茶だけはしないで。」
「うん…。」
（PC2のRP）
しばらくすると、PC1とアランのお見舞いに来たPC3もやってくる。
（RP：また少しばかり桜の調子がよろしくないから、しばらくは抑えるという情報）

## 【シーン11：胸に秘めたる思い（マスターシーン）】

桜とアランが2人で楽しそうに話していると、扉がコンコンとなる。
桜「あ、どうぞ！」
すると入ってきたのはエイミである
桜「あ！エイミ！！今日はPC2さんはいないんだね。」
エイミ「まぁ、彼（彼女）も忙しいからね。毎日は来れないよ。」
桜「まぁ…そうだよね…。」

エイミ「そうそう、はい。今日のお土産。」
といい、ピンクのサザンカの花束を渡す。（意味は永遠の愛）
すると2人を見つめていたアランが
アラン「……前からお聞きしたかったですが、お二人ってかなり仲がよいのですね…？」
エイミ「まぁ…そうですね。まだ2年程度の仲ですがね。」
アラン「2年でそんなにですか！？…いいなぁ…。」
エイミ「……僕からも質問いいですか？」
アラン「ん？なんですか？」
エイミ「…どうしてアランさんはそんな危険な戦い方をしているんですか？」
そうエイミに問いかけられたアランは顔が引きつり
アラン「…えっと…、は、早く強くなりたいから…ですかね！？あ、危ないってわかってはいるんですがね！！」
エイミ「……では質問を変えましょうか、あなたは誰のために”生きたい”のです…？」

アラン「……。」
そう、エイミに言われたアランは黙り込んでしまい、顔は下を向いており、表情が読み取れない。
エイミ「…失礼、少しばかり踏み込み過ぎましたね。ちょっと早いですが、僕は帰りますね。…ですが、あまり危険な事ばかりしているとその人を不安にさせますよ。」
そういい、エイミは出ていく。
アラン「…彼…中々いじわるですね…僕だって…分かってるつもりでいるのですが…。」
そう言い、アランは布団に潜る。
桜はただ黙って、何も言わない…。

## 【シーン12：アランの退院（PC3）】

それからまたしばらくし、ようやくアランの退院する日。
桜の木はいまにもつぼみを開きそうだ。

PC3はアランを迎えに行くべく部屋を訪れていた。
桜「また寂しくなりますね…。」
アラン「僕もたまにお見舞いに来ますよ！」

桜「…えぇ…、ありがとうございます。ですが、今度はちゃんとお見舞いで来てくださいね。患者としてまた同じ部屋に来るというのはやめてくださいね。」
アラン「あははは…桜さんもそういう冗談、言うんですね！」
そうアランが話していると、扉がガラっと開き、PC3がやってくる。
（PC3のRP）
アラン「あ！先輩！わざわざありがとうございます！あ、では桜さん、失礼しますね！！」
桜「はい、また。」
そういい、アランとPC3は部屋を出ると、廊下で片手にナズナの花束を持ったエイミと出会う。（花言葉：あなたに私の全てを捧げます）
エイミ「あ、アランさん、今日が退院の日でしたか。おめでとうございます。」
アラン「エイミさん、…その、ありがとうございます。」
そういう、アランはなぜかよそよそしい。
エイミ「では僕は桜のとこに…」
といい、2人の横を通ろうとすると
エイミ「あ、そうだ、PC3さんに聞いときたいことが…。」
エイミ「できれば…2人で話したいのですが…。」
といい、エイミはアランの方をチラッと見る。
アラン「えっと…じゃ、じゃあ、僕は先に行ってますね。入口で待ってますね。」
エイミ「ありがとうございます、アランさん…。」
「……、PC3さん、あなたにとって”生きる”とはどういうことですか？」
「…ではもしあなたにとって大切な人が今にも亡くなりそうにしていて、そして助ける手段が見つからない時、あなたはどうしますか？」
「…なるほど…、僕にとって…生きることは大切な人のためにあると考えてます。もちろん僕の考えですがね。そしてもし、大切な人が亡くなりそうなら…僕は…僕の生きる”意思”を分け与えたい…そう思ってます。」
「お時間を取らせてしまい、申し訳ない。では僕はこれで…」
そういい、エイミはその場を去っていく。

PC3が退出後、アランがまっていた。
「先輩、前の約束、覚えてますか？」
「…いまなら話せる気がするんです。先輩に、先輩だから聞いて欲しい。」
「……僕は、3年ぐらい前、クリーチャーに殺されそうになったとき、幼馴染を亡くしてるんです。」
「杞憂　智成(きゆう　ともなり)、彼はとっても勇敢でした。」
「どっちの両親もとあるクリーチャーに負けて、私の方に魔法が飛んできてもうダメだって思った」

「死を覚悟して、目を瞑ったのに、代わりに温かい液体を浴びていて、目の前に…」
「智成(ともなり)が、たってた。あかくなって…そのまま」
彼女は、震える声を押さえ、いつも通りを装う。
「ふぅ、ちょっと、怖かったんですが、少しは前に進めてるんでしょうか？
…引き止めてしまい申し訳ないです…では僕はこれで失礼します。」
そういい、先に前に歩き出すアラン。
その彼女の背中は、少し寂しそうであり、震えているように見える…。

## 【シーン13：不安（PC1）】

アランが退院し、更に経ったある日のこと。
PC1はいつものように桜のお見舞いに来ていた。
しかし、ここ最近桜の調子があまりすぐれないのだ。
よく、咳をしては、すぐに寝たり、酷い時は吐血まで。
食欲もあまりないようで、最初会った時よりやせ細っているようにも見える。
少し前まで元気だった彼女が嘘のようだ。
「ごほっ、ごほっ…、ごめんなさい…。せっかくPC1さんが来てくださったのに…。」
（PC1のRP）
「…PC1さん…、少しあなたに聞きたいことがあります…。」
「あなたにとって、”生きる”っていうのはどういうことですか？」
「…私にとって生きることは私の為であり、私以外の人のため…そう考えてます。だって、私以上に苦しんでる人や幼い子が亡くなったりしているんですよ…。それなら私はその子たちの分まで生きてあげないと…失礼に値します。エゴだとかどうとか言われようが私はこの考えを変えるつもりは毛頭にありません。」
「では、もしあなたにとって大切な人の命が消えそうなとき…あなたはどうしますか？」
（RP）
「そうですか…もし…大切な人の命が消えそうなときは…私は、その人のそばに居たい…。こんな身体でも、それでも大切だからね…。」
といい、寂しそうな顔をする桜
「…暗い話をしちゃいましたね！ごめんなさい。ちょっと最近調子が悪いからネガティブになっちゃってしまってましたね。大丈夫です、まだ死ぬ気なんてありませんから！」
といい、身体の前で握り拳を作る桜。
（PC1のRP）

## 【シーン14:花散らしの雨（PC2）】

(BGMは雨音が最適)
4月8日の雨の日…時間は夜に近く、おぼろげな十三夜月(じゅうさんやつき)が浮かぶ。
…この時期に降る雨は、花散らしの雨といわれ、ハーベストでもっとも一般的な桜であるソメイヨシノはすでにこの時期にはほとんど散ってしまうというのに、街灯に照らされた薄紅色（うすくれないいろ）の絨毯を濡らしていき、木はより一層密度を低くしていく。
明日にはきっと、ハーベストで桜を見ることはほぼできなくなるだろう。

この日、PC2だけでなく、アラン、PC1、PC3も予定があり桜へのお見舞いはエイミだけだった。

今ごろ、ハーベストのとある窓から校庭を覗けば、寮へ向かうエイミの姿がみられるだろう。

だが、今日は違った

思い詰めたような、そんな顔で散りかけている桜の木を、傘も差さずに外でながめているエイミがいる。

PC2が近づき声をかければ、ただ、ぼんやりと上の空で返事を返す。

エイミ「……PC2さん。」

君がその様子を心配し、エイミを傘の下にいれてやるか、室内につれていくと、ずっと彼は涙を静かに流し続けてる事に気づくだろう。

「いま、情緒を落ち着けることが出来なくて…情けないですね…僕は…」

「落ち着くまで、泣いている理由を(ここにいる理由。)全部、聞き流すだけでもいいので、話させてくれませんか？」

「今、どうしようもなく…怖いんです。」

「生きることも、死ぬことも。」

「…僕は、桜に会う前まで、ハーベスト入学前っていうのもありましたが、独りぼっちだったんです。」

「だから、独りぼっちの桜の想いが、痛い程に良くわかる。」

「ですが、彼女には時間が残ってないんです。」

「…たぶん、彼女がいなければ、僕は僕として生きていけない気がするんです。たとえPC2さんが側にいてくれたとしても、彼女の側を離れたくないから。」

「…もし、PC2さんの大切な人が、死にたい、だなんて言い出したら…どうしますか？」

「ああ、答える必要はありませんよ、僕は言えないので。」

「…すこし、落ち着きました。つまらない話を聴いてくださってありがとうございます。」

「僕は、……”明日”の準備があるので、これで……。」

そういい、天から降り注ぐ涙のような雨の中、エイミは何も差さずに寮へと歩いていく。

## 【シーン15：前触れと異変（PC個別⇒PC全員）】

次の日の4月9日、PC1がいつものように桜のお見舞いにいくと
「あ、PC1さん…、その、ごめんなさい…。ちょっと今日は一人でいたい気分でして…。また明日にでも来てくれませんか？」
「（理由は）その時になれば、話します…。」
と門前払いされる。
（PC1のRP）

最近桜のお見舞いに行こうと、エイミから誘われていたPC2。
しかし今日はエイミが話しかけてこない、どころかエイミを見かけず、エイミがいる変身魔導の教室に行っても全員知らないらしい。
（PC2のRP）

カント先生からの連絡がきたPC3。
内容は
アランからの連絡がなく、返事も返ってこないというもの。
もしかしたらまた無茶をして、危険な状況に陥っているのかもしれない。
探してきてくれないか？
という内容。
（PC3のRP）

そしてPC3がアランを探し回ろうとすると、桜のお見舞いから帰ってきたPC1、そしてエイミが見つからず、うろうろしていたPC2と合流。
（PC達のRP）
3人で話をし、アランとエイミを探すことに…。

すると、3人で話し合っていると、黒き森から歩いてくる人影が…。
確認すると、アラン＝ルイだ。
「ん？あれ？先輩じゃないですか。どうかしたんですか？」
「え？ああ、連絡がなかったから心配したって…。やだなあ…。大丈夫ですよ。まぁ…心配かけたのはあやまります…。」
「…でもね、先輩、僕、わかっちゃいました…。僕は”生きた”いんです…その為に戦っているんですよ…。”彼ら”の分まで生きないといけない…。だから…僕と戦ってください！そうじゃないと、僕は多くの人を護れない！！だから…！！！」
すると、彼女は自身の発動体を構える…。
彼女の表情はまるで何かを覚悟したような表情…。
（PC達のRP）

アラン＝ルイとの中間戦闘
発動体を破壊されたアラン＝ルイは
「ごめんなさい…ごめんなさい…智成…。」
といい、倒れる。
PC達はアランを医務室に連れていく。
そして、カント先生から今回の情報収集を3人に依頼する。

## 【シーン16：情報収集】

情報1：永麗桜について
永麗桜についての情報はほとんど目新しいものはなかった。
彼女は12年間、ずっと病室で過ごしていたのだ。
そのため、多くの情報はない。
だがしかし、2年前の4月11日、彼女の誕生日。
彼女は今までより明るくなったらしい。
更に看護師に聞くと、その時と同じくらいの時期に急に「エイミ」が来たと言う…。

情報2：エイミについて
変身魔導、2年のエイミ。
彼について調べると、彼自身の戸籍はほとんどが嘘。
つまり彼、「エイミ」という人物は存在しない、ということ。
またどの友人にきいても彼の過去はしらず、行きそうなとこも知らないという。
ただ一人、桜を除いて…。

情報3：アラン＝ルイについて
杖魔導、1年生でカース特対のアラン。
彼女は第一感染者だった。
また、彼女について調べると、彼女の親はアランに「多くの人を護りなさい」と厳しく言われていた。
だが、それでもあそこまで他人を護るとは思えない。
さらに調べてみる必要がありそうだ
情報4:アランの過去について

情報4：アランの過去について
アランについて調べていると、ある事件の関係者にアランの名前があった。
それは今から3年前の事件。
アランの家族とアランの家族と交流が合った杞憂家（きゆうけ）の人が、クリーチャーがあまり出ないという野原に来ていた。
しかし、そこに大型クリーチャーが現れ、家族を襲った。

そしてまだ9歳のアランにクリーチャーの攻撃が飛んでくる直前、その攻撃を杞憂家（きゆうけ）の長男である杞憂智成（きゆう　ともなり）がアランを護った。
そのあと、報告によると、なぞのクリーチャーが大型クリーチャーを退け、そのあと杞憂智成を病院に連れていくが、間に合わず亡くなったと書いてある。
アランの異常なまでの護りはそこから来ているのかもしれない。
また、昨晩黒き森で、アランとエイミの２人が言い争っているとこを見た生徒がいるらしく、その後エイミがアランに手をかざすとアランの様子がおかしくなったとの情報…。
情報5：アランに感染したカースについてを解禁

情報5：アランに感染したカースについて
今回のカース事件だが、どうやらアラン以外に感染者は見つかっていないようだ。
そのため、今回のカースが一体なんのカースかはいまだ不明。
しかし、アランに感染したカースはかなり微弱な物で、アラン自身もカースが使えないくらいのカースらしく、他の感染者が見つからないことから2次感染はほとんどしないものではないかと思われる。
また、彼女は常日頃から異常なまでに他人を護っているが、これは護りたいという欲望か、それとも…。

情報が全て提示されると、エイミの場所を聞くために桜の病室に向かうことができる。
（情報を集めた時には夜遅く、面談時間を過ぎているため、明日にならないと聞きにいけない。）
（また無理やり病院に行こうとしても、いくら病院でも患者が優先されるため、通す事は許可されない。）

## 【シーン17：居場所（PC全員）】

情報収集した次の日、４月１０日の朝
3人がエイミの過去や居場所を聞くために桜の病室に向かい、ドアをノックする。
「…はい、どうぞ。」
と元気のない桜の声が聞こえ、3人は中に入る。
３人の目に映る桜の表情は今までの明るさはなく、何かを堪えるように無表情だ…。
その桜の後ろの花瓶には、ハナミズキが飾られていた。（昨日エイミがこっそり植えた）
(花言葉：「私の想いを受けてください」「返礼」「永続性」)
「あ、皆さん、おはようございます。どうかされましたか？」
「エイミの（過去と）居場所ですか？…、ごめんなさい、言いたく、ありません…。」

（ここでカース事件の事に関わっているかも等の事を言わない限り、桜は口を割らない。）
「……、そう…ですか…。なら仕方ありませんね…。ですが、過去についてはお話しません。…しかし、場所なら思い当たる場所があります。」
といい、地図を広げ、とある場所に丸を付ける。
そこはハーベストから歩いてすぐ、しかしここからだと少し時間がかかる、黒き森の奥地で木が密集していない唯一開けた場所。
「彼はおそらくここにいます。」
（PC達のRP）

PC達が病室から出ようとする。
その時背後から声が聞こえる

「PC1さん、皆さん、彼の事を、お願いします。」
といい、部屋をでるPC達に頭を下げる桜。
（PC達のRP）
PC達が部屋を出た後、PC達に聞こえない声で桜が
「…ごめんなさい…皆さん…。」
と、つぶやく。

## 【シーン18】

PC達が桜からの地図を頼りに目的の場所に向かおうとすると、行く先から様々な魔法が鳴り響いているのがわかる。
どうやらトラップのようだ。
（PC達のRP）

クルドサック
1：魔法トラップ：落雷
解除方法：テレポート、各種オペレイト
ペナルティ：5点のダメージと麻痺Lv1

2：魔法トラップ：流れ星

解除方法：ブリンガー、テレポート、フォース、各種オペレイト
ペナルティ：5点ダメージと混乱Lv1

3：魔法トラップ：降り注ぐ光の柱
解除方法：ブリンガー、テレポート、各種オペレイト
ペナルティ：10点ダメージと火傷Lv2

PC達が魔法トラップをくぐり抜けると、PC3の携帯に着信が…。
着信者はアラン…。
電話に出ると、「先輩…、僕には護れなかった…けど先輩なら…、どうかエイミさんの事をお願いします…。」
それだけを言うとアランは電話を切り、PC3の携帯に音声ファイルが添付（てんぷ）されたメールが…。
音声ファイルの内容は…

アラン「……録音、始まったよ。」
エイミ「ありがとうございます…」
アラン「…録音を始める前も言ったけど、僕はクリーチャーだとしても君を…命の恩人を殺せるような勇気はないよ。」
アラン「桜さんやPC2さんとの様子を見ていたら、なおさらね。」
エイミ「…ええ、知っています。…だから、僕や桜の友人でいてくれたPC1さんやPC2さん、そしてあなたの友人であるPC3さんを利用することにしました。僕が死ぬために。」
アラン「ッ……」
エイミ「安心してください。まだ3人にはなにもしていませんから。」
アラン「違う！なんで僕には生きろと言ったくせにエイミは死のうとするんだよ！おかしいだろ！！」

エイミ「……君と、であったときの僕は只の名もない、本能のまま生きるクリーチャーでした。」
エイミ「…まあ、この性格でしたから、極悪非道なクリーチャーにもなりきれない、何者でもなかった"僕"と言えるでしょう」
エイミ「そんな僕に、エイミという名前と、居場所をくれたのは、桜だったんです。そんな彼女に僕は、なにか与えたかった。」
エイミ「だから、僕は叶えられる範囲で願いを叶えたくて、彼女のお願いを聞いたんです。」
エイミ「彼女は、"ただ側にいてほしい。"と、いいました。両親も仕事などでいない彼女はいつも、いつも死との恐怖に一人で戦ってるというのに、それだけを僕に望んだんです。」
エイミ「僕はあのときからこの２年間、ずっと覚悟してます。彼女の死のあともずっと側にいると。」

アラン「…じゃああのとき死ねなかった僕はなんなんだ！ますます君のいってることが矛盾して…」

エイミ「僕は”人間”でいたい。」

アラン「…は？」

エイミ「…僕は、本能が邪魔して死ねない。生きる本能に逆らえない。
…人はそれすらも選べるじゃないですか。
…僕は選びたい。全部を飲み込んで、本気で彼女の横にいたい。
本能なんかに自分の意思を曲げられたくない。」

アラン「…」
アラン「じゃあ、賭けをしよう。」

エイミ「賭け？」

アラン「PC3さん達が君と戦って、心臓を破壊し終わった上で、それでも奇跡を起こしてでも、君の命までもを奪うことを拒否したら、君は僕と同じように生きなきゃいけない。」

エイミ「…酷ですね、そうなったら僕は死んでるも同然です。」

アラン「それは僕も同じだ。」

エイミ「…」

アラン「君は、これから、PC3さん達が君を殺す動機を作るため、僕にカース感染させるだろう？"生きたい"っていうカースを。」
「そうなったら僕を真似すればいい。僕が彼の分まで生きたいと思ってるように、君は彼女を待ち続けて、全部終わった後に、延々と見てきた世界を彼女に語るんだ。」

エイミ「…出来るんでしょうか？人にもまだ、なりきれていないこの怪物が。」

アラン「やるしかないんだ。そうやって悩んでるエイミの姿こそ。人間そのものだから。」

エイミ「…カースを扱って、本能を抑制できないのに僕のことを人間と例えるのですね。…アランさんは、矛盾した考えがあるのに自我を確立していて、不思議です。」

アラン「ほら、早くしなよ、君の覚悟、突き通せるものならやってみろ。」

エイミ「…」

ここで音声データは終わっている。

（PC達の反応）

## 【シーン19：出迎え（PC全員）】

4月10日の夜
PC達が数々のトラップを潜り抜けると、視界が一気に広がり、上空には月が見える空間にたどり着く。

ふと、風が吹き、1枚1枚の花びらが光のマナで、薄紅色（うすくれないいろ）に輝く桜の花吹雪が舞い、小川に落ちて流れてく。
そこに写る八重桜（やえざくら）の木は皆輝いていた。
足を踏み出し、自分達を取り囲む桜の木を見ればみな美しい花を咲かせ、辺りに充満する優しい光と小川の音が、夢のような、趣(おもむき)がある幻想的な時間と光景を可能にしていた。
この空間は、誰にとっても儚く（はかなく）も美しく、見るものに生きる活力と希望を与えてくれるような場所だった。

だが、君たちは、この不釣り合いなまでに優しさ満ち溢れるマナの持ち主であるクリーチャーを探しにきた。

そしてその空間の真ん中に、たたずむ少年が一人…。

「あなた達ならここまでくると思いましたよ…、PC1さん、PC2さん、PC3さん…。」

月光に照らされながら3人の方を向く人物。
エイミだ…。
エイミはニコッと笑い
「3人を待っていましたよ…。」
「…いいでしょう？この空間…あたりには桜の木…そして風が吹けば桜の花吹雪…、」
「力の弱い僕が、ここまでにするまで2年もかかったんです。」
といい、3人の方に顔を向ける。
「…僕を討伐しにきたんでしょ？では、早速始めましょうか…。」
といい、手を3人の方に向ける。

（PC達のRP）
（PC達がそのまますぐに始めるといったらすぐに開始）

（PC達が話し合う、少し待って等）
「…待つ？（話し合う等の戦いを止めた理由）、3人は僕を、クリーチャーを倒しに来たんだろ？なら、すぐに始めないと敵が逃げるかもしれないぞ。」
「それに、この空間は2年間、ずっとため続けてきた僕の魔力で、僕の力が増幅するように作られてる。
強い力を制御できない僕は、君たちをいまここで本能のまま手加減出来ずに殺してしまうだろう。」
「…そんな弱い意思で何が護れる！君たちはハーベスト学生！僕はクリーチャー！僕の意思を折るつもりでも受け入れるつもりでも答えは同じだ…君達の戦う意思を見せてくれ…。」
強制戦闘

エイミとの最終戦闘

ドリーム・ウイング発動時、姿が変わる。
翼が生え、角が伸び、鋭い爪が現れる。
これがクリーチャーの…ここの桜と不釣り合いな”エイミ”の真の姿…。

戦闘開始と同時に特殊特技　桜舞い散る、この場所で…を発動。
イマジナリーウイングの後、最初のアクションフェイズで特技　準備はいいですかを発動。
次の攻撃で必ず倒れる時に特技　望まぬ本能を発動。

リアクションダイスを振り、魔法を決定した後に、特殊大魔法　ラスト・ディスティニー（僕の掴んだ願い）を発動し、エイミのリアクション魔法を全て無効にする。

特技　望まぬ本能時
PCからの攻撃を、本能からか、無意識に光の盾をエイミの前に出現させる、その形はまるで巨大な桜の花…。
「…、最後まで、僕の意思を捻じ曲げるな！！」

大魔法　ラスト・ディスティニー（僕の掴んだ願い）詠唱
エイミが手をかざし、自身を守る障壁に向かい
「この願いは、僕の願い、そして彼女の願いでもある…僕の意思に反し本能よ、その力を失うがいい。」
大魔法　ラスト・ディスティニー
「これが最初で最後、僕の運命に抗う時だ！」

戦闘終了後
(エイミを救うという判断をPC（PL）達がしたら、(a)を導入。状況によって変わる)

PC達からの最後の攻撃を魔法で防がず、そのまま”わざと”自身の心臓部にPC（アタッカー）の攻撃を受けるように見えた。
（PCのRP）
「…ははは…さすが…ですね…、とってもいい攻撃…です、ごふっ…。」
心臓部が破壊され、口からは血を流し、今にも消えそうなエイミ。
「…こんな事させてしまい、申し訳ありません…。ただの僕のわがままに付き合わせてしまい…。」
続いて彼は口を開く、自身の過去について…。
「…僕は元は”ただ”のクリーチャー…名前なんてない、ただのクリーチャー…。でもクリーチャーの中でも僕はかなりの変わり者らしく…、この性格とカースも相まって、クリーチャーの中でも落ちこぼれ扱い…おかげで僕は独りぼっち…。クリーチャーという立場上、人間とも和解できずにいたんだ…、そんな中出会ったのが彼女、桜だ…。桜は僕の事を最初天使様、だなんて言ってさ。笑っちゃうよね…。全く逆の存在なのに…。…でも僕を恐れない人間ははじめてだった…だから聞いた…彼女の願いを…。」
「…彼女の願いは…僕と”一緒にいてください”…。それだけだった…病気を治したり長生きなんかじゃなくただ一緒に…。そして僕は、桜というかけがえのない友達と名前”エイミ”を授かった…そして僕は、人間になれたんだ…。」
「…じゃあ、なんでカース事件を起こしたかって…。ふふ…、ごめんね、それだけは言えない…。でもカース感染させるやつは人間じゃなくクリーチャー…そうだろ？少なくとも僕はそう思う。だから…僕は事件を起こさせて貰ったよ。殺させるなら他の人でなく、君たちにね…。」

「さて……逝く前に、PC3さん、アランさんを利用して申し訳ない…けどもし彼女が目を覚ましたら言っといて欲しい…、”彼”は生きてほしい、危険な事をしてまで護ってほしいなんて思ってないって…。」
「PC2さん、今まで騙していて本当に申し訳ない…。君との時間はとっても楽しかった…。つまらない話に付き合ってくれて、桜のお見舞いにもいってくれて…。僕にはもったいない友人だ…。あ、そうだ、僕が消えたあと、僕の部屋に入ってみてくれないか？君宛の手紙を置いといた…。是非よんでほしいです…。」
「…PC1さん、桜のこと、ありがとうございました…。3人にいえることですが、あなた方のおかげで彼女はこの数か月寂しくなかったと思いますよ…。」
「…では、3人とも…また会えたらその時は…、友達として…接してください…」
「…さい、ごに…桜の、と、なりに、いて…く、ださい。」
そういい、エイミはマナとなり、分散していく。
そして、幻想的な桜を、彩る淡い光の一部となり、消えた。

(a)現実に引き戻すかのように、pc1に電話が届く
「PC1さんですか！？桜さんの容態が急変しました…。桜さんがあなたの名前を呼んでいて…。早くこちらに…彼女の横で、安心させてください……。」

## 【シーン20：PC1エンディング】

エイミとの戦闘を終えた後、あなたは桜の病院に来ていた。
すると、受付の人がPC1(全員)を見ると
「あ！PC1さん！！は、早く桜さんのとこに行ってあげてください！！」
という。
（PC1のRP）
桜の部屋に行くと、ドアが空いており、そこから医師の叫び声が聞こえる。
桜のベットの周りには、多くの医師や看護師が集まっている。
（PC1のRP）
「…あぁ…PC1さん…。」
といい、PC1の方に手を伸ばす…。
「…来てくださり…ありがとうございます…。窓から見ていたのですが…エイミは、苦しまずにいけましたか…？」
「知ってます…だって私がお願いしたようなものですからね…。もうすぐ死ぬ…そう分かった時、正直怖かった…。まだ、死にたくない…。でも運命には逆らえない…。だから最後にエイミにお願いしました…。あなたの”生きる意志”をください…と…。そして私は感染した…彼のカースに…。…私は、最低

な女なんです。好きな人の命を奪ったようなものですからね…。彼がこういう選択をするのはわかってました…でも…どうしても…彼と一緒が良かった…だから…。」
彼女は泣き出し、微笑んだ。
横には、本来この場所にまで届かない、"あの"薄紅色に光る桜の花びらが、数枚舞い込む。
「…PC1さん、ありがとうございます…。私は、最低な女です…。でも、あなたたちと会えたこと、本当にうれしかったです、たのしかったです…。それだけはどうか…。」
そういうと彼女の手をPC1から離れ、心電図は1本の線に…。
病室には、心電図の無機質で、残酷な音とともに、12時を知らせる時計の音が…。
それは桜が13歳になった事を知らせるはずの音だった…。
離れた彼女の手、そしてPC1の手には1つのボイスレコードが握られていた。

## 【シーン21：PC2エンディング】

机の上に手紙と花がおいてあり、そこにはこう書かれていた…。
「PC2さんへ
今までありがとうございました。
あなたといた数か月間、本当に楽しかった…。
僕は、あなた方にいった通り、クリーチャーの中で落ちこぼれ、その為ずっと独りぼっちだった…。だから彼女の、桜の気持ちも理解できた。アランさんを護ったという智成くんにかんしては、もし、僕が彼の立場なら同じ事をするだろう…。僕は桜に名前を貰ってから彼女のために人間として生きようときめて、そして人の道を外れることがあれば、死ぬ覚悟もあった…。そして、今回…事件を起こしてしまった…。死ぬ覚悟はできていました…。他の誰か…じゃなくて、あなたたちに…って。その自殺の為だけに、アランさんを巻き込み、3人も巻き込んだ…。わがままばかりで申し訳ないです…。
最後に…僕を殺してくれてありがとう…。桜のこと、よろしくお願いします…。
クリーチャー　エイミより」
おいてある花は、アジュガという花。（花ことば　強い友情）
(エイミ”だけ”が生きていた場合、"最後に…"を読みかけたところで手紙を取り上げられる)

エイミ「…やってくれましたね、あなたたちの、意思の強さには敵わなかったです。」
「賭けは彼女の勝ち…ですか…。」とぼそっとつぶやく。
エイミ「ですが、僕はもう、この世界にいきる理由などありません。ここにいる意味も。」
エイミ「…生かされてるというのに、僕に、生きる意思が、見当たらないんです。」

エイミ「…そうなった以上、僕はハーベストに通う理由もない…ですが、あなたの、あなた達の想いを踏みにじれば桜も悲しむ。」
エイミ「…」
エイミ「……僕は、僕の寿命がつきる日まであの場所で……彼女を待ちます。」
エイミ「…ふたたび、生まれ変わった彼女に会える日まで……。」
(エイミは、クリーチャーとして、あの場所を魔力で守りながらひっそりとくらす)

## 【シーン22：PC3エンディング】

医務室にいるアランと会話

君たちの事より彼らを優先したことを謝る、(エイミの死を止めてない場合はエイミを止められなかったことなど)

## 【シーン23：時計の音（マスターシーン）】（桜が生きていればこのシーンは飛ばす）

大雨の音から音声データは始まる…。
今日の桜は天候のせいもあるのか、調子が悪く、咳をいくらか繰り返す音が入っていた。
「なんか…久々に2人っきりだね…。」
「そうだね…。」
「最近はPC1さんやPC2さん、PC3さん、アランさんとか…いろんな人が来てくれてたからとっても楽しかったね…。」
「…うん、ちょっと騒がしかったとこも合ったけどね。」
「ふふふ…そうね…。けほっけほっ…。」
「……。」
「…私ね…そろそろ、山場みたい…。お医者さんがね…言ってた…。持っても明後日くらいじゃないかって…。」
「……明後日って…。」
「そう、私の誕生日…。誕生日が命日なんて、神様は意地悪ね…。」
「…。」
「だからね…エイミにお願いがあるの…。」

「…なに？」
「私にね…最後の”生きる意志”を分けてほしいの…。」
「……それって……。わかった…。」
長い間沈黙する。
(そういうと、エイミは桜の両頬に手を添えて、目をつむり、おでこを合わせる…。)
……時計の針が、静かなこの空間に鳴り響く。
「あの時みたいに…二人っきり…だね」
「…そう、だね……」
いま、この空間は”あの時”と同じように2人だけの空間…。
しばらくし、エイミは桜から離れる。
「ほら、これで”意思”を分けたよ。」
「…ありがとう…エイミ…。」
「うん…、じゃあ僕は行くね。」
「…うん、またね。」
「うん…、また”明日”…。」
エイミは部屋を出ていったのか、扉が開閉する音と、足音が遠ざかる音がする。
「ナスタチウム…困難に…打ち勝つ…」
「…エイミ……。」
するとごそごそと音がする
「PC1さん、PC2さん、PC3さん、今聞いているのは誰ですかね…。これを聞いている頃には私はこの世にはいないんでしょうね…。」
「私は皆さんにあえて本当に嬉しかった…、本当に楽しい時間でした。」
「もし、もし生まれ変わってまた皆さんと会えたら、その時は後輩として仲良くして色んな事を教えてほしいですね♪」
「…ありがとうございました…そして、巻き込んでしまいすみません…さようなら…。」
録音はそこで終わっている…。

## 【シーン24　2人の行方（マスターシーン）】

【2人とも死亡の時：A】
黒き森の奥…。

そこに広がっている桜の空間…。
魔力の供給がなくなった花は散っていく。
一枚…一枚と…。
その静かな空間に響き渡る小川のせせらぎ…。
そこに映る2人の人影…。
少女の影ははしゃいでるように見え、羽の生えた人影は少女の後を追う。
すると、少女の影は立ち止まり、手を伸ばす。
羽の生えた人影はその手を取り、2人は嬉しそうにどこかに去っていく…。
星の片隅で起こった小さな出来事は、記憶だけ記されて、爪痕すら残さず消えていく。

【桜だけ生きている時：B】
黒き森の奥…。
そこに広がっている桜の空間…。
その空間に座っている人影…。
空を見上げ、”何かを見ている”よう…。
「わがままで、あなたを振り回してごめんなさい」
「また…この場所を2人で見てみたかった…」
「私だけ、幸せになってごめんなさい。」
「あなたと……エイミと一緒にいれなくて、ごめんなさい。」
その静かな空間に響き渡る言葉…。
彼女は、大好きだった故人を想い、彼が用意したプレゼント…この空間で懺悔しながら、散っていく桜とともに、与えられた時間を歩んでくのだろう…。

【エイミだけ生きている時：C】
黒き森の奥…。
そこに広がっている桜の空間…。
その空間に座っている人影…。
空を見上げ、”何かを待っている”よう…。
「…僕は…何のために生きているんだ…。」
「…僕は…どうすれば…そっちに行けるんだ…。」

「…君に…いつ、会えるんだい…桜…。」
その静かな空間に響き渡る言葉…。
彼は、その命が消えるその時まで、その空間を護り続けるだろう…。

【なんの事故か二人とも生きてハーベストに通うということが可能になってしまった場合：D】
黒き森の奥…。
そこに広がっている桜の空間…。
その空間に座っている二人の人影…。
空を見上げ、”過去を懐かしむ”よう…。
桜「約束、守れてよかった…」
エイミ「そうだね…桜…」
桜「ねぇ、エイミ…彼らに出会えたのは、なんのいたずらかな？」
エイミ「…うーん……"運命"それとも"神様"？」
桜「どっちでも！こんな素敵な未来をくれた誰かに感謝しないと、ね？」
エイミ「…うん。」
その静かな空間に響き渡る言葉…。
彼らは、命が消えるその時まで、幸せを噛み締めて生を謳歌する…。

## エンディング

魔法学園RPGハーベスト
「君の願いは～Your wish～」
エンドAなら：願い叶える時計は、今止まる
エンドBかC：願い叶える時計は、今砕け散った。
エンドDなら：願い叶える時計は、今再び動き出す。

【シナリオについて】

君の願いは～Your wish～情報 - Google ドキュメント

桜が最後生きているのはプラシーボ効果

桜の空間
桜の空間
この空間は、他のフィールドと共存する。
この空間上でエイミは発動タイミングで光属性マナを**1**つ発生する。
更にエイミはラウンド経過ごとに以下の効果を習得し、その効果は累積する。

1ラウンド目　エイミは暴走、憎悪、発狂、怨念、怨嗟を受けない。
2ラウンド目　エイミにグッドステータス：浄化**Lv1**を付与する。このグッドステータスは戦闘終了まで消去されず、レベル増減も起こらない。
3ラウンド目　エイミの攻撃力を**10**に変更する。
4ラウンド目　エイミは魔法**Lv5**以外の光魔法を全て習得し、エイミの特技「桜の花びら」、「生への願い」の「**1d5**」を「**2d5**」　に変更する。
5ラウンド目以降　エイミ以外のキャラクターはアクションダイスに**1d5**ダイス追加する。

このシナリオは3月後半の出来事

クリーチャー　エイミ
クリーチャー　エイミ - Google スプレッドシート

アラン＝ルイ
アラン＝ルイ（カース感染） - Google スプレッドシート

アラン＝ルイ　12「一人称　僕」
ギリシャの勇猛な軍人で王であるアレクサンダー大王から継承された名前

ルイ、高貴な人

クリーチャー　エイミ　（そもそもクリーチャーなので年齢などない）「一人称　僕」
エイミ（**Amy**）は、古フランス語で「愛しい」という意味
カース内容は「生きたい」と願うカース

永麗　桜（えいれん　さくら）12歳　「一人称　私」
永遠に綺麗に咲く桜という意味

過去背景
とあるとこにとあるクリーチャーがいた。
そのクリーチャーに名などない。
なぜなら彼のカースがあまりに非力、あまりに無駄なカースだからだ。
更に彼の性格はクリーチャーにしてもあまりに優しすぎる、そのためその性格も相まって彼はクリーチャーからは無能呼ばわり。
しかし人と接しようにも自身はクリーチャー、受け入れてくれるはずもない。
彼ほど、クリーチャーが似合わないやつもそうそういないだろう。
彼はあまりにクリーチャーとしては優しすぎる。
襲われている人を護り、無抵抗のクリーチャーをも護ってしまう…。
そんなある日ある一家が襲われているのを見つけ、退ける…。
しかし、護り切ることはできなかった…。
彼は自身の無力さを更に嘆く…。
そんな夜に、彼は出会った…。

あるところに永麗桜という女の子がいた。
しかし彼女は生まれつき身体が弱く、何度も入院を繰り返している。
そのためせっかく作った友達もだんだんいなくなり、そのうち独りぼっち。
更に追い打ちを駆けるかのように、彼女が7歳の時、治療法が確立すらされていない重い難病にかかってしまう。
彼女はこの世に絶望する、しかし絶望しても死のうとは思わない、なぜならこの世には自分よりも更に幼く亡くなっている子供がいると知っているから…。
彼女は寂しかった、そのことは表に出さずに、ずっと心の中で潜めながら、生きていた。
いや、生きていたかった。

そんな一人と一匹…いや、2人が出会ったのは桜の誕生日の前日。
満開の桜が綺麗な花吹雪となって散っていく**4月10日**…。
その日は彼女の体調もよく、午前から両親と看護師にちょっと早めの誕生日を祝ってもらった。
とても楽しい…しかし、楽しい時間はすぐに終わり、彼女は睡眠時間に…。
しかし、その日はなぜか寝付けず、彼女は窓を見つめていた。
するとそこにまるで天使のような羽の生えた男の人がいた。
「…？天使様？？」
「…ん？…っ！！な、なんでこんな時間に起きているの！？」
「え、なぜって…なんだか…眠れないから…。」
「眠れないって…君は子供なんだから早く寝ないと…。」
「…寝るのが怖いの…。」
「…怖い？」
「うん…、だって寝ちゃったらもう起きれなくなるかもって思っちゃって…。」
「……。」
桜はあまり顔にも態度にも、そして言葉にも出さない。
しかし本当は怖い、いつ死ぬか、いつ起きれなくなるか…。
その言葉を話した彼女の手は震え、身体も震える。
「あ、あれ…な、なんだろ…これ…。なんで私、震えてるの…？？」
彼女は震える手で震える身体を抑える。
しかし今度は涙が溢れ
「なんで私…泣いてるの…？…ぐず…なんで…。」
「……。」
すると、彼は立ち上がり、月を見る。今日は雲一つなく、月は綺麗な満月。
「君、名前は…？」
「…え？え、永麗桜…。」
「そっか…じゃあ、桜…。君の願いは何…？」
「…え。」
「叶える事ができるかわからない、けど叶えれるなら…叶えてあげる…。」
「……。じゃあ…私と、”一緒にいてください”。」
「え…！？」

男性は驚き、桜の方をふりむく。
「そ、それでいいの！？ほ、他に願いは…！？」
「これが私の願い……。もちろんずっといてほしいってわけではないです！…ただ、友達としてでも、いいので…。ダメ…ですか？」
「…い、いや…わかった…でも……。」
「うん！じゃあ、決まり！私は桜！さっきも言ったけどね！よろしく！」
「え、えっと…よろしく…。」
「…？あなた、名前は？名前を教えてくれないと呼べないよ？」
「…名前…僕に名前なんかないよ…。」
「名前がない…？んー…。じゃあ！私が付けてあげる！」
「え！？い、いや…それは…！」
「うん！あなたの名前はエイミ！」
「…エイミ…エイミ…これが僕の名前…？」
「うん！そうだよ！これからよろしくね！エイミ！！」
「…うん…よろしく、桜…。」
手をかわす2人、そんな時に12時を告げる鐘の音がなる…。
これは彼女が10歳になった瞬間、そしてクリーチャー…いや、”人　エイミ”が誕生した瞬間でもある。
そしてその出会いが彼を変えた。
彼は、決意する。
（…僕は人として、生きよう…。彼女のためにも…。僕を人にしてくれた彼女の為にも…。その為、僕は二度とカースを出さない…。もし僕がカースを使って人に感染させたら…。）
彼は決意し、人としてその人生を歩むことにする。

彼女と知り合ってからおよそ数か月のある日。
「おはよう、桜。」
「エイミ…おはよ。」
「今日は調子がいいみたいだね。」
「うん…。」
「ん？どうかした？桜？」
「え、…。」
すると、桜は窓を見て。
「…もっと別の光景もみたいなって…。」

「……。」
「わがままなのはわかってる。あまり身体を動かすわけにはいけないから…。でも…正直、綺麗な桜をここだけしか、しかも春の間だけしか見れないのは…寂しいなって…。」
「……。」
「…ってごめん。エイミに言っても仕方ないよね。つい、あなたにはわがままになっちゃうみたい、忘れて。」
「……わかった。」
「…え？」
「今日の夜、ここよりもたくさん桜が生えてるとこに連れていくよ。」
「…え？そ、そんなことができるの？」
「うん、今日の夜のあの日と同じ時間、また来るよ。」
といい、エイミは部屋を出ていく。
「え、エイミ！？エイミ…！！……。」
独りぼっちになった桜…少し寂しそうに窓にある桜を眺める…。
そして夜…時計の針が**12**時を刺す**1**時間前…
桜は窓を見つめていた…。
すると、バサバサと音が聞こえ、近づいてくる。
「ごめんね、桜。」
「…ううん、大丈夫だよ、”天使様”。」
「それやめてよ、僕には名前があるでしょ、”エイミ”って」
「ふふふ…そうね。で、エイミはどこに連れて行ってくれるのかしら？」
「…じゃあ、手を…。」
そういい、エイミは手を差し出す。
桜はその手を握り、エイミと一緒に窓から病院を抜け出す。
桜をお姫様だっこし、夜の魔導次元を駆ける。
「わぁ…綺麗……。」
魔導次元の夜の空を駆け、その下を覗き込む桜。
「ここもだけど、ここよりもっと綺麗なとこに連れて行ってあげる。」
そういい、しばらく飛ぶエイミ。
しばらく飛び続け、ようやく地に降り立つ。
そこは黒き森の奥…。
ハーベストから歩いて数十分に位置する場所。

そこにはたくさんの桜の木が並んでおり、目に入る一面には満開の桜…。
「…わぁ……。」
「ずっと探してたんだ…桜に見せるためにね…。」
「エイミ…ありがと…。」
「本当は桜の病気が治ってからって思っていたけど…ちょっとくらいならいいかなって…。」
「うん…私、今とっても感動してる…。」
「そっか…それは良かった…。また、桜の病気が治ったらここに来よ？」
「うん…、でも…もう少しだけこのまま……。」
「……うん…。」
手を繋ぐ2人、今この空間には2人しかいない…。
誰にも邪魔されない2人の時間…。
そして遠くからは、12時を知らせる鐘の音が…。

アラン＝ルイの過去
魔導次元出身で、まあまあ裕福な家庭の長女として生まれたアラン。
しかし、そんな彼女だが、親は男性が欲しかったらしく、名前も男性、見た目も心も男性にするように、そして勉強も魔法も親が厳しく育て上げていた。
それでも彼女は幸せだった…。
しかしある日、彼女が9歳の時、事件が起こる。
彼女には仲良くしていた男友だちがいた。
名前は杞憂　智成(きゆう　ともなり)。(意味　杞憂：無用な心配をすること、今回は違い、天からのおくりびと　智成：実力者、実行者)
彼と彼女は生まれた時からの幼馴染。
そのため、お互いにお互いの事をよく知っていた。
そんな中、ある日、互いの両親と出かけていた2人。
しかし、そこに巨大クリーチャーが現れる。
彼女たちの両親は戦うが、成す術もなくやられてしまう。
そして残った子供たち…。
彼女にめがけて魔法が打ち出される。
まだ発動体なるものを2人は持たされてなかったため、マナプロテクトもなかった。
絶対絶命…しかし彼女に攻撃が当たることはなかった。
代わりに暖かい液体が彼女にかかる。
智成の血液だ…。

クリーチャーの魔法はプロテクトのない智成の身体を簡単に壊す。
風穴の空いた智成の身体がアランの方に倒れ、アランはそれを受け止める。
「智成！智成！！」
「あ…アランちゃん…よかった…無事…？」
「私じゃなく智成が無事じゃないよ！！」
「えへへ…恰好つけすぎた…。」
「智成…！！」
クリーチャーは非情にも攻撃を仕掛けようとする…。
すると、大型クリーチャーの攻撃はなぜか止まる。
目を開け、前を見るとそこには翼の生えた人が…。
翼の生えた人とクリーチャーが戦い、何とか大型クリーチャーを退けると、遠くから人の声が、どうやら救助隊の人達だ。
アランはお礼を言おうと、目の前の人の方を向くがすでにいない…。
そのあと、智成は病院に連れていかれる。
しかし、間に合わず、息を引き取る。
それからというもの、彼女は更に勉強をするようになる。
そして、「彼の分まで、生きたい！そして多くの人を救って見せる！命に代えても！！」
…と矛盾した考えの元動くようになる…。